

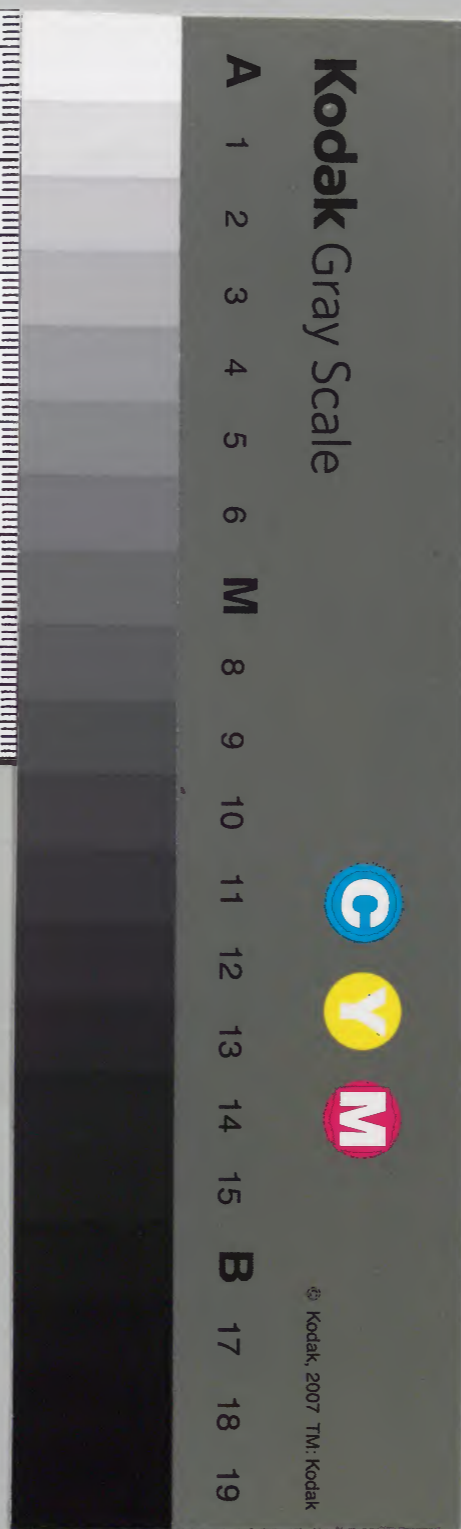
下野國誌

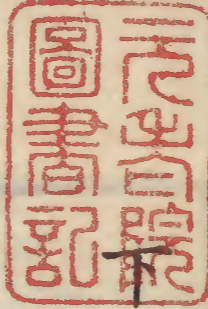
貳

			八	和
		一	八	書
		一	五	門
一	二	四	二	
冊	架	函	號	類

庫文閣内				
七		八		和
四		八		書
函		一	五	
二		二	二	
架	冊	號	類	

内閣文庫	
番號	和 8852
冊數	12 (2)
函號	174 229





野國誌二之卷

名所勝地

黒髪山

芳賀百姓越智直守弘識

國周

都賀郡日光山の奥ふあり、當國第二の高山、遙小武藏下総常陸
 等の國々、世にゆかりあり、世俗ハ男魁山トシテ呼ビ、日光山の入口、
 石街より中禪寺まで今道三里許あり、其中途馬返村、
 里許の間ハ牛馬の往返、夫より上の一里許ハ急ク、馬足、
 中禪寺より黒髪山の絶頂まで、三里許あり、嶮岨、是ハ毎歲
 七月七日、四十八日の垢離して登山、
 万葉集七 無名
 山下、
 ぬまをけ、
 ぬまをけ、
 ぬまをけ、

日光山古圖
御本坊藏
三幅對大懸
物縮圖



下野國誌二



全十一 柿本朝目人麻呂

ぬい玉の黒髪山の山香小山高ありまきまんとそあま

堀川百首 藤原公實 題正月雨とあり

旅人紅雲の香乃ら並や朽ぬらん黒髪山の山香たまの以

全 源信頼 題雪と河

ぬい玉の黒髪山小雲の積ひあうらうらものよそ何となく

全 隆源法師 題山とあり

ぬい玉の黒髪山の山香もつらふとあうらうらとやん群

新千載 正二位行長

色之ぬ黒髪山の山香やびきたつてさうらうら

新後拾遺 後三位頼政 家集より

才女くよおらむこを遠うぬ黒髪山小雲の香と雪

夫木雜 西行上人 題老人見花とあり

あまあつちりあしむて思ふ思ふ山小雲花咲よけり

歌枕名寄 藤原清輔 家集より

香君と子世しあはぬ玉の黒髪山山花もさうらうら

新和歌集 仙風法師

去る雪のきこぬぬをむら黒髪山小雲の香と雪

田園雜記 聖護院道興准后の紀行より

あまあつちりあしむて思ふ思ふ山小雲花咲よけり

全

日敷経てきたる物の毛にかゝれぬ黒髪山の山香けり

黄葉集 鳥丸大納言光廣卿の家集より

糸子くも黒髪山の山香けりあまあつちりあしむて思ふ

全

時をわぬくもあまあつちりあしむて思ふ思ふ山小雲

静舎集 藤原守万伎の家集より

をわぬくもあまあつちりあしむて思ふ思ふ山小雲

うけらる花 橘千蔭の家集より

香をわぬくもあまあつちりあしむて思ふ思ふ山小雲

名所今歌集 倭文子

あまあつちりあしむて思ふ思ふ山小雲

全

おれと人よけりてとらや

ぬいよれ黒髪山いこえとれとと青の月をたやあめらる

下野歌枕 僧正慈観

黒髪山いこえとれとと青の月をたやあめらる

全 高松秀材

黒髪の月をよとてう風い香の小笠をかこけよとや

全 源文忠

ぬいよれ黒髪山いこえとれとと青の月をたやあめらる

全 藤原元成

黒髪山いこえとれとと青の月をたやあめらる

全 藤原元成

黒髪山いこえとれとと青の月をたやあめらる

全 藤原兼綱

黒髪山いこえとれとと青の月をたやあめらる

全 物名黒髪山 廣淵龍住

黒髪山いこえとれとと青の月をたやあめらる

フシラヤマ 二荒山

日光山の古名ふくとと補陀洛山あまを歌ふとあまの山とて来り

妻しく下の佛寺部の日光山の条ふ記一とて

蜻蛉日記 右大将道綱母の日記とて

下野や楠のふととてあまの山とてあまの山とて

新和歌集 権律師謙忠日光山とて神祇の歌とて中ふとて

世に照る日の光とてあまの山とてあまの山とて

回國雜記

やまの山とてあまの山とてあまの山とて

黄葉集 東照宮の御遷宮ふ 院の御使とて参向とて時とてあまの山とて

冷泉為景御紀行 慶安元年四月上旬とて

山とてあまの山とてあまの山とて

全

かきふきの山姫の鳥日さあかきしるのこ歌をさ雪

縣居歌集 賀茂真淵家集より

下野や神の志しあやふらふらふたふ清世にこし

全

のこれさまにさあたりまきしけあらのこれあくる光りふ

静舎集 名所今歌集より

下野やあふれふのあふあふくそあひくまの民んや

全

夏まきそ梅さくねるあふふらふらふまきとらさるれ

阿豆麻歌 橘枝直家集 草野集より

あふふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

全

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

名所今歌集より

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

全

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

草野集 橘枝直

家集より載り

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

うけしを

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

下野歌枕 観山法師

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

全

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

勝田諸持

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

全

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

三善真袖

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

全

清原高興

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

下野國誌二

全 旋頭歌 源英村

言さすしらすやききくうさき法世むけ
ささし山の庭は岩根

五

ウタノハマ
歌濱

中禅寺の湖邊ふあり委しくい佛寺部の日光山の条ふ記は、

四國雜記小今宵ハこゝに十三夜より月もつこま味を侍りき渺漫する湖水侍り
歌の濱とす所ハ紅葉色をあらわして月映侍れハ船を乗りそとあり

下野歌枕 權律師常然

名ふれぬ秋の深きいあゝまの道とてゆむ船あはとも

全 權大僧都玄海

教へ浦の歌のまも色ハあら浪とらありはなはらきよまを

全 下野入

香かきい水みあき秋の深きとてまはあきと新き

全 本城守棟

時あぬけしとてこの深きうららけあつこのぬ袖は

タキノヲ
瀧尾 三本杉

日光山の瀧尾權現の鎮よりいゆ及所あり三本杉と云古木ありびこをり、
委女しくい佛寺部日光山の条ふ記せり、

四國雜記瀧尾と申侍りハ無双の靈神ありこれハ飛龍の姿目をせり侍りきとあり
世々地経てむせり契りのまはせりやこの瀧の尾乃瀧の白糸

黄葉集

武隈の松よびまきの数とて二本は杉もさきとてん

為景卿紀行
いよすすい馬き前かき黒髪山の山よりそ流る瀧の尾は水

全 柴子世とす河の一子数とて二本の杉よまらきと

下野歌枕 藤原春村

全 瀬の尾乃家吹ぬるき山風と岩よあふりてきつと

全 源 守村

全 ぬきと人あふりと流のき乃流の白玉あふりてきつと

全 平梅好

全 滝の尾れ流の志系きき世成る魚と甲せはらりてき

全 源 芳規

全 ちりそめとさゆりあふりてきと流の尾乃言

全 源 芳規

全 ちりそめとさゆりあふりてきと流の尾乃言

ヤマスゲノハシ 山菅橋

日光山の入口ふあり、今ハ神橋と唱ふなり、其下の流れハ大谷川と云、中禅寺の湖より落て来い、まぬ川ハ入り、ハ雲御抄ハ下野の山菅橋と云、枕草子ハ山菅の橋名をきき、云々、とあり、とあり、橋長ハ十四間許あり、朱塗ナリ、委ハ佛寺部日光山の条ハあり、
懷中抄 山菅の橋ハ此歌夫木抄ハ懷中抄とあれと懷中抄と云々ハ、
老の世とて城とありて、此橋ハ社あり、此山菅の橋

圓國雜記

法の水はたえ深く、るねは、いひ、く、ま、じ、山菅は、た、

黄葉集

久々の雪井を、た、た、これや、あ、の、聞、う、ら、い、く、山菅の橋

為景卿紀行

ひ、く、ま、じ、雪井の、く、く、と、や、ま、く、人、ふ、く、え、ら、く、山菅の橋

漫吟集

契冲阿闍梨歌集あり

古き、あ、ら、の、う、ら、い、ま、さ、く、く、く、く、く、く、く、山菅の橋

下野歌枕

源 惟一

あ、ら、の、ま、さ、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、山菅の橋ハ、巖を、根、を、な、ま、く、く、

權大僧都慈帆

今 けうくひしおいかせつおく雲より白くれり 秋山菅の橋

全 清原高保

けく云海子月の光りもかやまてあじいらう山菅の橋

伊吹山 里

都賀郡吹上村小あや木馬馬より西北の方まで今道一里餘あり其所より善應寺と云真言宗の古寺ありて山号を則伊吹山と号せりれり境内小觀音堂とて是は古標茅原ありてをこれらうりて其あより其あより艾草ありて生ひ葉の形尋常より大きくて葉を兒七尖れり尤功能他小異ありて甲田貞丈久徐嘯隨筆に記しり伊吹山の事能因り坤元儀小此山美濃と近江との境なる山ありて下野ありと記しり顯昭の袖中抄第二の卷小下野あり契沖阿闍梨の勝地吐懷編に記しり皆下野ありと記しり

六帖

ながかりとつきの山なりともなやと思ひてやあは

今 何ちよあやいれのかや一思ひよあは

今 ますましめとつきの山なりともなやと思ひてやあは

此歌夫木抄山吹久き山吹今いりまの山を山吹けり山吹花とありて次下に定家卿もあはりてうらまをよめれり山吹の花とあり契沖云是以上の歌をとりてよ給ふ意り拾遺愚草小云いりてきとありて一定せびあまるといふの山ありて云い驚いれり山吹の頃よかくいむべし是は此本を正義とよむべしとあり

堀川百首 藤原仲實

秋とつきの山ありていりまの山なりともなやと思ひてやあは

枕草子 清少納言下野ありと記しり人よ

れやひたよからぬ山の庄せもなほけりいりまの山なりともなやと思ひてやあは

下野國誌

後拾遺 藤原實方

かくもたふえやいさみのけりし草さへもきしがゆり田を

新古今戀一 和泉式部
ふりしきこのけりし草のさへもきしがゆり田を

同戀二 中宮大夫家房 攝政大臣家歌合の歌あり
いほもさしきこのけりし草のさへもきしがゆり田を

建保歌合 家隆卿
色少ねいさみの山のお紫のけりし草さへもきしがゆり田を

元仁元年禅林寺殿七百首 寄嶺戀
許ゆをといふけりし草のさへもきしがゆり田を

新勅撰戀二 藤原頼氏
けりし草のさへもきしがゆり田を

續後撰秋下 麻縁法師
いほもさしきこのけりし草のさへもきしがゆり田を

續古今戀四 中務卿親王
いほもさしきこのけりし草のさへもきしがゆり田を

千首 為尹
いほもさしきこのけりし草のさへもきしがゆり田を
濃との思多
りまの山あり
此頃八混下
近江の山あり
草とてしき

新後撰戀二 大宰權帥為経

いほもさしきこのけりし草のさへもきしがゆり田を

新拾遺夏 衣笠内大臣
いほもさしきこのけりし草のさへもきしがゆり田を

新後拾遺戀四大納言通具
いほもさしきこのけりし草のさへもきしがゆり田を

歌枕名寄 清少納言
いほもさしきこのけりし草のさへもきしがゆり田を

晩花集 下河邊長流家集
いほもさしきこのけりし草のさへもきしがゆり田を

紅塵集 上田秋成
いほもさしきこのけりし草のさへもきしがゆり田を

下野歌枕 藤原春村
いほもさしきこのけりし草のさへもきしがゆり田を

今 越智守弘父のけりし草のさへもきしがゆり田を

下野國誌二

今 月やるさやうと海いこるるてややうまのあかりの風
今昔冠歌伊吹山きりもくさ よしんくーとん
いふとわおやうのそほてー 葉のあやふさくはせのそは

シメチカハラ
標茅原

都賀郡河原田村小あり、伊吹山より十餘町東の方とて今考らむら原と訛
程々契沖の勝地吐懐編より標茅原ハ伊吹山の裾野とありと記しあり
則此原中に艾草ありて生じさると宇都宮より日光山ありて標茅原と
唱へ來る所ありてさ處の説どもよめまじと論ずるも日光山の方より
艾草ありて是を摘てひく物ずるは何物ある調ト喰之味ハ甘美
みて苦汁ありて深山より生るゆゑ多ぶべしとて水戸のくまー原氏の藁
桂偶記より伊吹艾の論ハ伊吹山標茅原ハといふ日光山の奥より太郎嶽
よつらなれり山ありと云ハ妄説なり原氏より考へ得たりて日光山名所記

云小冊を見て、是と究めーものあべー、

六帖 夫木抄す

下野や志あつる原乃さーとくさ其の思ひよ身をや焼らむ

新六帖 衣笠内大臣
草さるー志あつる原ハ霜れて身にあらまー此のなほは

夫木抄 先俊朝臣
下野や志あつる原のそくはしーいなりふちゆる思ひそ

文治百首 俊成卿 夫木抄
このえー志あつる原此下原志ふちをてよー経わさる

散木集 源俊頼朝臣家集
秋くれ、志あつる原よま記をひら秋のそひをさする唱あわ

新古今秋教 此歌ハ清水觀音の歌ありてはやー觀音の歌ハ此標茅原の觀音をべー
ねこのめ志あつる原ははーもささる世の中よ、らんさる

新千載雜 下野國誌二
いすれい志あつる原此冬そのさーなきていすれをさすらん

下野歌枕 倭文刀自

秋くも志のちる原のきりくもさせしうを海をちりやなく

全 飽間光知

さを蒸の志めつう京此志のへふ志秋くもき家もも秋ん

全 丹治信義

恋るもいさしと志にれと妹と家志めちるあれはけりやあ

ハロノヤシマ

室八島

都賀郡惣社村小あり、其隣郷は國府村ありて古ハ惣社村も國府此
分郷あり、其所小清水と云所あり、煙村と云も並てありて中と煙の立
一所ありと云傳へる、今ハ突生村小作る、その隣郷小壬生あり、彼十幹の
兄弟小依て近世書改めしものあり、さて袖中抄第十八、下野國の野中
小嶋あり、俗ハ室のヤサゆとて、室ハ所の名、其野中に清水の出る氣の立
か煙小似るれり、是ハ能因ガ坤元儀小見えり、俊頼の歌云、歲暮

さらひまをる室のヤサのこやさらひよオのけりもそんあをとあなれ

此歌ハ竈を室のヤサとよみ、こやさらひよオのけりもそんあをとあなれ

守弘按、袖中抄ハ記し、如く室ハ所の名、ヤサと云ハ煙の立、依て
唱へる名あり、其ゆゑハヤサと云ハ元來竈の事あり、文德實錄ハ齊衡二
年十二月丙子朔大炊寮大八島竈神あり、天安元年四月条あり、見え、三代
實錄ハ大膳職後五位下大八島竈神ハ前と見え、竹取物語ハ石
上の中納言燕の子安貝といふのを取り得んとて、ヤサハゆのさのさへ
のけりまをる落給へりといふも、色葉和難の三ハ金と、ヤサハゆと云
あり、大嘗會行幸も、金のつとをヤサハゆのさと云れり、記し、和名
抄ハ竈ハカマ、金ハカナとあり、ヤハゆハ竈の古名なり、ヤサハゆハヤサハ
黒川春村云、色葉和難ハ金とあり、竈あり、後世金とカマといふより、寫
ひる、東鑑脱漏ハ御所金殿鼎鳴とあり、金ハ竈とあり、今ハ五德
あり、同書ハ賀殿ハ竈鳴とあり、アレカナハヤサハゆとあり、ヤサハゆハ
あり、先革ハこの事と思へり、あなれ、委し、びと、り、
或俗説ハ室ハ八島ハ那須郡あり、大野室、薄室、逃室、柏室、數々室、板室、室、井、
岡室等を云ありといひ、或人ハ都賀郡の茂呂馭の邊りあり、中島曲嶋

下野國誌二

鯉島、大河島、萩島、高島、卒嶋、島田等の八ヶ村をさして、茂呂の八島ありて、
この附會の説よく論ずるべし。

清輔袋草子卷三小源経兼下野守ニテ在國之時、或者

便書ヲ持テ向國府、不叶之間、無術之由ナンドイヒテ、ハカ、レ

キ事モセス、冷然トシテ出テ一ニ町許行テ、更ニヨビカシケレバ、不

便ナリトテ、可然物ナド、可賜カト思テ、ナマジヒニ歸来ルニ、経兼、

云アレ見タマヘムロノヤシマハ是ナリ都ニテ人ニカタリタマヘト云、弥、

腹立氣有テ出云、此事十訓抄卷二よしとて、少しもうそを教ふ事あり、是則ち

平治物語卷二、平治元年少納言信西事小坐して、民部卿成範下野國

みつて我もまむべから室八島と見やり給へば、みり心げそくのが

アテ折るゝ感涙とむらむらおもはれ、いかに聞くぞ聞えたる。

あつちよはつちよのき下野や室のやまは流るはらひハ

此歌續詞花集に載て、これハ東路の室乃や一箇とあり、

成範卿ハ正二位中納言、少納言通憲男なり、遠流の事ハ公卿補任、すこ思管

抄、いささかり、平家物語ハ、櫻町中納言成範卿と記、さか、て月詔和歌集

ハ、成範卿ハ、やけのこ、いささかり、東の方ハ、さか、る道、て霞とあり、

日を強つ都ハ、いささかり、さか、る道、て霞とあり、

ま、清輔朝臣の家集、ハ、成範卿ハ、やけのこ、いささかり、遠く、さか、る道、

返一成範卿、
いささかり、さか、る道、て霞とあり、

義経記卷二、義経陸奥國より、宇都宮大明神を、あ、を、さ、み、室

のや一箇を、さ、み、室、に見て云、

親鸞聖人行録下野國に御経廻ありて室のやうかと
いふ所は、輻く御住居すまんとあり御旧跡の所は室明神
乃東よりありて思川といふ渡りあり、それより東に越え
て花見岡といふ小山あり。是上人御幽居の跡なり。此所を大光
寺村といふ近隣に大なる池あり。上人常は愛をせ給へりといふ今
よのり云々

烏丸光廣卿日光山紀行も富田を通り、朽木と云所を過て、
音小まきく室のやうは、いそそなり云々とあり、
右の書どもいそそ室なりやうま、今の地なりと云明證あり、かくまが甚うと
いひ立上上の附會り説あれはあり、

狭衣物語卷一ふ中將の君はあり、室のやうは、後の宮の

源氏宮なり

こまきく、やうは、給へり云々

宗久都の裏ふいそちりの世にあづき、なぐちなり
うさむめ、まむい、いそ、室は、やうは、あり
せむい、云々

宗長東路裏に壬生といふ所ふゆくと云々室は、やうは、近き
ほむれ、亭主中務少輔綱房に終これよりあひ見り
す、あり、誠ふち、いそ、いそ、いそ、折り
秋あり、いそ、あり、あり、

東路の室は、やうは、秋なるをいそ、いそ、あり、
このやう紹巴、下紐卷一、室のやうは、いそ、あり、

下野國誌二

慈元抄卷上よ。

昔有馬王子零之れいりて下野國より下り給。其國より
五万長者とて富人あり。其より立寄せ給て奉公と爲さし由
を宣ふ。長者奉置或時酒宴の半よ巡の舞ありてさか舞なり。
彼若殿原も舞ありと長者といふ程ハ。王子やうて立く
歌をよみて給ふ。

いねむり川を以て柳ゆくぬに流をいふその根はうせ
と詠して舞給ふ程ハ。長者只人よ何れとて座鋪を立く。
御手を引て上坐おぼす奉りたれとねん。其頃長者獨此
娘を持より。うねて常陸の國司小参をよきより約束有

々れハ。彼王子忍逢玉ひて程なく懐妊有々れハ。國司より
催促有々程と。娘ハ早死しりてとて。喪葬の儀式をありて
野邊よ送る。棺ふいつなりと云。魚を入て焼て煙を立。彼魚ハ
焼白い人を焼し似れハ。あつたその心をよめ給。

あつた後の言のや。また立ふり誰のいりてあやえ
このうらややくともあり。それよりしてこのいりてあやえん。
是歌故王子幸ふ逢玉よ云。

按ふ右の王子のよと給ふと云歌ハ日本書紀顯宗卷ふ。

いふひり川を以て柳ゆくぬに流をいふその根はうせ

とありて、則ち顯宗天皇いふ弘計王と聞えよ給ひ。時よ播磨國縮
見屯倉首の家よ仕へて新室歌宴よよ給ひ。歌あり、さればその王を

全旅 定家卿

左をいへて不従ふにえやきききくまのや梅のほろ煙を

全一 蓮生法師 俗名宇都宮頼綱

おのひやるまのや一はれそけえいけり煙のちやまはらん

續古今冬 藤原信實朝臣

作らまきりおのひありやきききくまのや梅のほろ煙のち

全戀一 六帖夫木よの島の部小出せり

下那やまのや梅よきききり思ひありと今こそいふはれ

全戀二 俊成卿 一女

いれや一はれの煙はきききききききききききききききき

全 齊蓮法師

とをいへばまのや梅は煙たなまききききききききききき

續拾遺旅 藤原親朝 此は新和歌集よはし書ありてこそいふべし

ふりありききききききききききききききききききききき

新後撰夏 従三位家隆

全戀二 前参議雅有

煙のりまのや梅はきききききききききききききききき

續千載秋上 藤原宗秀

云霧をまのまのや梅の秋風よの中まききききききききき

續後拾遺戀一 源重之女

人成れし思ひをまのまのまのまのまのまのまのまのまのま

新拾遺戀一 前中納言匡房

煙のりまのや梅はきききききききききききききききき

全秋教 法印守遍

あふまききききききききききききききききききききき

弘長百首

後九条内大臣 夫木

月詰集 小侍後 後拾遺の小侍後と別あり是は作者部類よ

雲葉集 隆祐朝臣 且一

夏くはまのまのや梅はききききききききききききききき

石清水別當光清女とありて母小大進あり

万代集戀三 衣笠内大臣 百首歌奉り多時寄煙戀とていふことあり

舟に何ぞも思ひをわめさるるや一室のや一浦も煙こそんそ

金槻集 鎌倉右大臣實朝公家集

あつしきいさひくもあつ煙のつ室乃やまればさのよゆえ

續詞花集雜中藤原成範朝臣

我の免よ何ぞもさるるのよ東海の家ればや一浦も煙ぬ思ひハ

新和歌集春藤原時朝 笠間長門守

煙のつ室乃や一浦乃ちのつ行い家もむらや云氣むらむ

全雜 藤原基綱女

今はたに煙をわめさるるや一室のや一浦も煙ぬ思ひハ

全 藤原親朝 塩谷周防守

なすさるるのや一浦と思ひにするさるるよさるるよ

全 藤原景綱 宇都宮下野守

とそはるる煙や一室のや一浦の國つ神のちの思ひさるむ

全 源行宗

むらりりさるるのいふや一室のや一浦の煙ありと架

全 安部資氏

とあまきらく室乃や一浦とさるるれい煙もわかれ名はいさるる

全 清原成朝

よとそに思ひの煙こそはるるよ一室のや一浦も煙ぬ思ひハ

法性寺内大臣家歌合攝津

とそはるる室のや一浦の煙ありと架さるるさるる

千五百番歌合三宮

とそはるる室のや一浦の煙ありと架さるるさるる

歌枕名寄 永縁僧正

奥山よ多々統せぬ炭竈成室乃や一浦と思ひさるる

漫吟集

故き火の煙をこむら紗のあつ室のや一室のよゆえ

全

東那の秋乃焼来る心むら室のや一浦のなつとせむら

全

足さるる室乃や一浦の煙ありと架さるるさるる

宗長東路裏

東路の室は秋の色のせむし夕煙を

黄葉集

室のやーま見よすりたる雨のやうなれいとあり

雨雲はそよすりて室のやーまた煙を

為景脚紀行

煙の煙やーまた民の電燈室は煙を

下野歌枕

観山法師

名をそと敷室はやーまた雨のうはさる日さらする春柳

全 久米千壽

立の月を室のやー雨のうはさる日さらする春柳

全 深見三橋

雨くふり室のやーまた雨のうはさる日さらする春柳

全 源 綾彦

のけり室のやーまた雨のうはさる日さらする春柳

嘯社

右ふ同く、國府村の北乃方より惣社明神と室の八島との間、
森をとりたり

朝忠卿家集

本院の將曹をとりたり

下野歌枕 藤原千條

全

志の木の葉をとりたり

全 源忠寛

ひくく木にほろりたり

全 紀幹有

志の木の葉をとりたり

全 妙知尼

立安をとりたり

全 守風法師

とれりたり

三毛毘山 驛

都賀郡にあり、兵部式に三鴨驛とあり、此所あり、和名抄よりあり、山頂より七八町許の登りあり、東北面は下津原村と云、西面は西浦村、南面は太田和村と云、三ヶ村入會の地なり、やむも古く三鴨郷あり、さう、後より三香保崎とあり、此所より、ミカホハミカモの訛り、万葉集十四東歌下野國相聞往來歌

志のつめあはれおほのさかすれさきりさるにんむもむ
下毛 野 三 毘 小 楯 如 真 細 子 等 誰 氣 將 持

契沖の代匠記よ、誰か男をうむむと云意と云、或人の誰か氣うむむ、我氣かむむと云意と云、小楯の如より、小女等の意あり、契沖のつめ、如くかむむと云、相聞と云、相思ふ心を互に告聞ゆむと云、後世は戀と云、むむ、むむ、むむ、万葉集より、親子兄弟の相志と云、歌よ、載てとや廣し。

下野歌枕 藤原守舍
さきよむむあはれ世の古くやむ志のつめはに志を楯の葉

全 藤原春村
さきよむむあはれ世の古くやむ志のつめはに志を楯の葉

全 橋守道
水鳥のさかしの山ふさく花の浪るもさかすけむく誰か子

全 清原高保
我宿乃楯の葉さきよむむあはれ世の古くやむ志のつめはに志を楯の葉

全 源守村
みは鳥のさかしの山ふさく花の浪るもさかすけむく誰か子

全 藤原元成
源さきよむむあはれ世の古くやむ志のつめはに志を楯の葉

全 人志
源路のさきよむむあはれ世の古くやむ志のつめはに志を楯の葉

下野國誌二

三香保崎 関

同所あり、八雲御抄より三香保崎慈覺大師誕生の地とあり、今下津原
の大師の産湯あり給ふ跡とて鹽窪と云所あり、鳥光廣卿の日光山紀行
にも記さるり、さて此山の北より西に關川と云流せり、末に鯉名沼とて南北
三十町東西十五町許の沼あり、入江尻の流に安蕨川は落るなり、
新千載旅 蓮生法師 万代集より新和歌集より 藻塩草

石まめあそりの川よよけられて、うやの崎よりかやとまへん
下野歌枕 藤原春村

いやよひのうのほの崎をわらうひなのさき雪をこころいふ
安部光枝

我より妹よりほの山をまへ人の目の鼻のあはれなり
源正名

梅あけついでにわらうもまへ人の崎をみかたしきも
三善真袖

まへにわらの屋をよめたりかへはの溪よりしきなり
僧正慈観

草枕日を寝ていそくろくもいそくか屏の鼻も秋風を吹

安蕨川原

安蕨郡佐野天明驛の西を流る川あり、往古に天明の東を流る川あり、
水上六同郡秋山と云所より出て末に佐野中川とて入るなり、
万葉集より東歌下野國相聞往来歌

志んつらねあそりの川系に石まめをよめたり
頼政卿家集 河邊千鳥とあり

あつと女と妹とあそりてまへに下野をあそりの川系より身もあそり
名所今歌集 藤原磯足 東歌よりあり

石まめわあそりの川原のうらもあそり家のあそり
橋千蔭 千岡より下野に旅立ち多頃あり

下野の河をわ川系にわらうもあそり家のあそり



從安蘇川原眺望三毛山之圖



下野歌枕 藤原守舎

菅子鳥さるもの御しされ石まはあすの川原よ我はあす

岡島義雅

つらきまも子みよの時のとるまわりの川原よあつた

源惟一

石まわあすの川原よ石まわあすの川原よ

倭文刀自

夢路のさるもの御しされ石まはあすの川原よ

よまの人ま

あすの川原よあすの川原よあすの川原よ

安蕪沼

安蕪郡佐野天明驛の東乃入口小屋街と云所の田乃中にある今ハ
大田よりありて、つた東西四間許南北六間許の沼と云れり、真菰生ひ

茂りて水もいそむわづりたり、されば世俗ハ真菰の池とも呼ぶなり、其東
の方三町許ハ浅沼村あり、此所ハ古城跡あり、往昔阿曾沼四郎廣綱
居住ハ東鑑ハ阿曾沼四郎ハ浅沼四郎とも書り、されば浅沼ハもと阿
曾沼の訛と云ふ事あり、

沙石集卷八ハ中頃下野國ニ阿曾沼ト云所ニ常ニ殺生
ヲコノミコトニ鷹ヲツカフ俗有ケリアル時鷹狩ノ歸サマニ
鴛ノ雄ヲツトリテ餌袋ニ入テ歸リヌ其夜ノ夢ニ裝束尋
常ナル女房姿カタチヨロシキガ恨フカキ氣色ニテサメト
打ナキテイカニウタテクワラハガ夫ヲバコロサセ給ヘルトイフサル
コトコソ候ハ子トイヘバタシカニ今日メシリテ候ヘシモノヲト云
猶カタク論ズレバ

日暮レバサソヒシモノヲアソ沼ノマコモ隠レノ獨寝ゾウキト打ナガ

テフツ、トタツチ見レバ、駕ノメドリナリ。打オドロキテアハレニオモ
フホドニ朝ニ見レバ、昨ノ雄トハシチクヒアハセテ雌ノ死セル
アリケル。是ヲ見テ發心シ出家シテ、ヤガテ遁世ノ門ニイ
リ侍リケルトナン。カガリ傳テ侍ルアレナリケル發心ノ因縁也。

さて此因縁の物語ハ、著聞集より載テ陸奥國赤沼のこゝに、殺生人ハ田村の
住人右馬允と記し、著聞集ハ、橘成季ハ撰ミ、建長六年と有り、此沙石集ハ、無
住法師の撰ミ、弘安二年と有り、同頃の書多ク、いふ事多ク、事ハあり。

漫吟集哀傷

つげねの山のやちあそ沼のつらきとちあそをさるれ

下野歌枕 源音鷹

ひもりのをさるるあそ沼のまじりてあそをさるれ

玄雲のまじりてあそ沼のまじりてあそをさるれ

全 守川捨魚

あそ沼のまじりてあそをさるるあそをさるれ

全 源正照

あそ沼のまじりてあそをさるるあそをさるれ

安蘓山

安蘓郡あり、是とよ山ハ、あそで佐野庄より北よづきこゝ山を、とて
安蘓山と唱ふるなり、甲斐國の山を甲斐嶺といひ、陸奥國の信
夫郡の山を信夫山、安積郡の山を安積山といふ如し。

万葉集十四東歌相聞

かへつげあそそのまじりてあそをさるるあそをさるれ

全 譬喻歌

真麻群

あそ沼のまじりてあそをさるるあそをさるれ

佐野 中川 船橋 田

安藝郡佐野庄を云あり佐野中川と云ハ渡瀬川のことあり同郡足尾山の渡瀬村より出るゆゑに世俗然呼ぶなり船橋今の高橋村の邊りありとあり万葉集十東歌相聞往來歌

わづらひ佐野のさくらさくらや くれはまじりてさくらさくら

葦立

折

吾

將侍

今年

不來

さみづめ佐野の舟橋よりさくらさくらや くれはまじりてさくらさくら

全

親

避

吾

うづらひ佐野のさくらさくらや くれはまじりてさくらさくら

右の歌どもかつらわさくらさくら安藝山より下野なることや明きけ然るを万葉集よりさくらさくらと下字を上字は書誤りしものさくらさくら此れなり上古ハ上野ありんぞ知るさくらさくら舟橋ありあり上下乃國境あり佐野中川よりけ渡りしれはくれは大さくらさくらさくらとよさくらさくら上野の羣馬郡より佐野と云所あれど歌みくらさくらさくら彼所ハはちさくらさくら上野風土記ハ佐野中川

口風文章

下野ト上野ノ境ニアルヲ佐野ノ中川ト云今桐生川ト云又々渡瀬川トモ云是ハ下野ノ足尾山ヨリ出テ大間々ト桐生トノ間ヲ流ルハ群馬郡ノ佐野ナリ下上兩國ノ中川ニアラス云とあり是ハ大間々と桐生との間を流る川をいひて上野と下野との境ある川をいひてさくらさくらさくら此れ此のいひかたなり聞くに難し按ずる是ハ強て群馬郡の佐野を取らんともさくらさくら今下野は属せず佐野ありんぞさくらさくら上古ハ同一毛野國なり然らば今こそ下野あれ昔ハ上野ありんぞさくらさくら下野彼所ハハ上野なり微細な境を立て心をつけてよさくらさくらさくら廣くも人のさくらさくら地名を取てあつて穩便さくらさくら古書ハ正しく其所とさくらさくら證ありんはもとさくらさくらさくらさくら上野と下野との國のさくらさくらさくら廣くいんはさくらさくら世は聞えさくらさくらさくら舉て挾さくらさくらさくらさくら舉りしつらさくらさくら陸奥さくらさくら名所の出羽さくらさくら越の白山さくらさくら加賀ありさくら三河さくらさくら此御時の歌り地名も今遠江さくらさくら伊勢さくらさくら御時の歌り志摩の名所も類いなりさくらさくらさくらさくら

下野國誌二

東遊行囊抄卷二十。佐野渡舟渡也。是ハ利根川一流也。古歌ニ佐野ノ中川トヨミシハ此川由也。此川ヲ以テ上野下野ノ境トス。
千載意四 源仲正
佐野ノ中川流々として流るる波ありたり

新千載意五 為兼卿
くわらるる佐野の中川さのさかたき流るるさのさかたき

夫木抄 隆博卿
五月の月あはれさかたき流るるさのさかたき

或人ノ曰。今。上野ノ中ニ安中ノ邊ニ佐野ト云所アレド。古歌ニヨミシハ此所也。此所古へ上下ノ國境ナレバ。渡ニツイテ上野トヨコト妨ナシ。

彼佐野町ノ西州余町ニ船橋ノ跡アル昔ハ其邊ヲ船橋里ト云キ。

夫木抄 祐舉
いづれも佐野の中道を尋ねて家なきころ船橋此里

以上行囊抄小記より

田國雜記ハ
文明七年

田國雜記云、
かゝいづれも佐野の中道を尋ねて家なきころ船橋此里

此歌日光山の前件はあれは下野の佐野より給へり

同書に再び三月二日と在川青柳の庄館林と云ふ野ありて
過て佐野よりあり

いづれも佐野の中道を尋ねて家なきころ船橋此里

ともありされば道興准后ハ下野と心得給ひてあり

宗長東路の裏に十六日佐野へ歸り行ひしに太平と云ふ山寺あり般若
寺と云ふ二宿して連歌あり云明るある船橋を見よと云

おもひけし今も昔も佐野の中道を尋ねて家なきころ船橋此里

是も今も佐野の中道を尋ねて家なきころ船橋此里

蒲生氏郷紀行に佐野の船橋より里人の出侍り尋ねしに昔人を戀
々人のしるしあり有様と云ふの語を聞ておれは昔人を戀

東路のつら
永正六年

氏郷紀行ハ
天正廿年

下野國誌ニ

たれやみの佐助の船橋を渡る人なるかたは
とくくろく渡りつ上野國云々とあり

堀川百首 源師頼 題不逢意とあり

今 藤原顯季 題橋とあり

東路のさしの船橋を渡る人なるかたは

永久百首 源忠房 題不見書意とあり

つとせむはの船橋を渡る人なるかたは

後撰意二 源等朝臣

東路の佐助の船橋を渡る人なるかたは

詞花雜上 左大弁俊雅母

夕霧の舟のさしの船橋を渡る人なるかたは

續古今夏 祐威法師

五月の舟のさしの船橋を渡る人なるかたは

全意 家隆卿

東路の舟のさしの船橋を渡る人なるかたは

續拾遺意三 津守國助

さしの舟の佐助の船橋を渡る人なるかたは

新後拾遺秋 藤原信實朝臣

道遠の舟のさしの船橋を渡る人なるかたは

新續古今雜 前大納言為家卿

岡渡の舟のさしの船橋を渡る人なるかたは

夫木抄 為家卿

今 源仲正

志の舟のさしの船橋を渡る人なるかたは

月清集 後京極攝政

東路の舟のさしの船橋を渡る人なるかたは

拾遺愚草 定家卿の家集あり

志の舟のさしの船橋を渡る人なるかたは

全旋頭歌
うれうみみおきあたらう東北まのまゆねの川の

岩の柳のあしふくまゆね

宇都宮里

河内郡二荒神社を云あり今ハ地名也宇都宮驛と唱やれど往古ハ池邊郷と中頃ハ小田橋驛といひちと委ハ次の神社の条に記すなり

新和歌集

權律師謙忠

あつちもやあつちのあつちもやあつちのあつちもやあつちのあつちもや

全

藤原仲兼宇都宮より下りて當社三四大明神旅入をあれ給と聞寶殿の柱に書けり

松くのとらやあつちあつちのあつちあつちのあつちあつちのあつちあつち

四國雜記

福さへも松の松を思ひやれ松を思ひ松の里人

下野歌枕

神もさきうつらしむらうのさきよ来あく松乃為

全 源義長

花の舎ハ思はゆたお糸の白ゆくるまつのみ

全折句 大江千穎

うけし神つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ

衣川

塩谷郡栗山の奥より出て同郡佐貫の邊りて黒髪山より出る大谷川と落合ひ芳賀郡と河内郡との境を流き常陸下総を経て利根川に入あり水上より利根の川口まで凡今道五十里許あり然レ巴當國第一の大河なり故に往古ハ國名をも負はせて毛野川とも唱へあり

續日本紀よ神護景雲二年八月注下應掘防毛野川之状

下野國誌二

云々。常陸風土記。新治郡西毛野川界云々。とある。和名抄。河内郡衣川驛家と云。兵部式。下野國驛馬。衣川驛馬十疋とある。

按。延喜の朝より國名も下野と改められたり。其の毛野をばやうなして、キヌ川と訛りしものなり。さうするに衣川驛と云。所は河内郡と云われ。宇都宮の東の方なり。今の石井川岸のあたりなり。

懐中抄 歌枕名寄は近江守上総守の誤りなり

かみふかひつゝの影をよめ川はまなすねる流のあやかし
下野歌枕 田口河鳥

ハヤシのうらたてをよめ川はまなすねる流のあやかし

物部照庭

全 権大僧都賢順
さけ姫のおるまの標とよめ川をよめ川はまなすねる流のあやかし

全 川佐廣好
よめ流のあやかしをよめ川はまなすねる流のあやかし

藤原春郷

全 紗のゆめかたは衣川をよめ川はまなすねる流のあやかし
よめ川をよめ川はまなすねる流のあやかし
よめ川をよめ川はまなすねる流のあやかし

塩屋里

シホノヤノサト
塩谷郡氏家驛と喜連川驛との間に五月女坂と云所あり。和名抄。郡名よの塩屋ありて郷名よの塩屋なり。四國雜記。宇都宮を立て行道は塩屋といふ所あり。暮行すに里より煙の立を見てあり。移衣。よめ川はまなすねる流のあやかし。よめ川をよめ川はまなすねる流のあやかし。

歌枕名寄

下野歌枕

藤原躬鶴

塩屋の月舟はほろろと流れて雲をぬきやうきさるる

丹治花門

歌枕名寄

下野歌枕

坂上橋住

塩屋の月舟はほろろと流れて雲をぬきやうきさるる

坂上橋住

塩屋の月舟はほろろと流れて雲をぬきやうきさるる

高階友篤

塩屋の月舟はほろろと流れて雲をぬきやうきさるる

狐川里

塩谷郡あり、今ハ喜連川と改む、れど猶キツネ川と唱ふ者あり、
義経記卷ニ、あつゝ安達原行方原をうち通り、きつ川を

うち過て、ざげ橋の宿まつて馬をやとめ、衣川を渡り宇都宮

大明神をうらむを、白川古事考も、塩屋郡狐川と記しあり、

然るを生實國朝君古河公方義氏朝臣の家を續て、天正十八年始て當所を

移住を、依て喜連川と改む、ハ民部式ハ九諸國部内、郡里等、名嘉名

を取も、あつゝ如く、さき文字ハ改し、のあり、

夫木抄 為家卿

わくふくのうら狐川にけあつゝ、けとくを、

里人のうら火のけも、けいふらちや、狐川に

漫吟集

下野歌枕 丹治花門

下野の川に柳夕風よ、ねを、ねを、ねを、

雀部春世

下野國誌二

權律師常然

全 中ノ川のほとりハいつともたにありて

山口安良

全 松川なるにありてや舟を以て松飼と云ふ

源正名

全 松川なるにありての松飼と云ふ

全 玉降の道ありて世に

玉降の道ありて世に

那須野

淘汰金 温泉

那須郡太田原の邊より陸奥の國境までを以て那須野原と云ふ其西北の方より那須嶽と云山ありて麓に温泉あり其所に殺生石と云ふ石あり

源翁禪師傳ふ

源翁禪師諱心昭號空外姓源氏越前國萩村人

也初生日空中有聲曰此兒為最尊幼投陸上寺

為沙彌性敏秀七歲誦俱舍論十六歲雜染受戒

沙彌釋典一千卷十八歲謁我山我山者道元和尚弟子也參禪門

究音近衛帝久壽年中一夕宮中之宴管絃及

深更殿閣大震燭火滅帝座下有寵妃玉藻前

身放光照殿階帝於是猶豫安部易詵ト之曰

是玉藻所為也忽化狐逃東國詔三浦友義明

千葉今常胤上総、又廣常、毆其狐於下野國那須野。義明射殺之。爾後百年餘，狐靈為石。世俗曰：殺生石。觸其石，則鳥獸人民皆死。時有僧大徹者，我也。欲止石怪而不能焉。後深草帝寶治年中。

詔源翁曰：往熄此怪。即師到石傍，拈破竈隨機緣。曰：汝既是石靈，何處來。性向何。收題偈曰：

法法塵塵端的底。本來面目未曾藏。現成公案大難事。異類中行任度量。舉拄杖卓一下。石忽破碎。

其夜一女子現謝禮曰：嫗得淨戒。生天言訖。沒自。

此源翁名鳴。洛鄙鎌倉。平時賴以奧州會津利根川莊為饘粥之資。云々。

破竈隨機緣云々。祖庭事苑卷二雪竈頌古の条。師居嵩嶽有廟甚靈。殿中唯安一竈。師入廟以杖敲竈。三下。咄此竈只是泥凡。合成聖後何來。靈後何出。又打三下。竈頌破墮落須臾。有青衣戴冠設拜云。我此廟竈神。今日蒙師說無生法。今生天中。時來致謝。師曰。是汝本有之性。非吾強言。即再拜而沒。とあり。是此傳の本。考合はる。

下學集小。文安元稔東麓破衲序と記あり

昔西域有斑足王。其夫人惡虐過人。勸王取千人。

之首其後出生支那國為周幽王后其名曰褒姒
滅國惑人死後出生于日本近衛院御宇号玉
藻前傷人無極後化成白狐害人惟多時俗欲驅
之先追走犬以試其射騎白狐知之化而成石飛
禽走獸當其殺氣者莫不立斃故謂之殺生石于
今在下野那須野原也犬追者始于茲矣但聽之
古老之口号雖不知本說且載之而已
和漢三才圖會 地之部六十六
下野國の条

一說云 後深草帝建久元年源翁于時四十二
歲偶過那須原有老夫語殺生石之所以源翁退
其靈怪欲救人憂到石邊示偈 文在前 其石三裂石
靈去鎌倉平時頼聞源翁驗德以奥州熱鹽邑賜
之於是創建示現寺 云按奥州會津盤大山有毒
石觸之禽獸皆死為陰毒所感砒石之類矣源翁
加治石破裂者不可誣也狐變女亦不珍也唯
近衛院侍女玉藻之怪異等實錄所未載也蓋狐

性靈成殺生石者附會妄説也云々

淘汰金ハ雲御抄ハ金の部ハ云々然レハ須のゆり糸も出されり
民部式ハ下野國砂金百五十兩鍊金八十四兩云々古ハ云々出レ所ハ
那須の武茂山ト云所ハ常陸國の境ハ近レ今ハ猶金洗濯ト云所ハ其の
名残也云々一云々淘汰の事ハ谷川士清ハ和訓禁のゆりの糸ハ米也云々
水ハゆハ淘汰の義あり云々延喜式ハ相摸國餘綾ト淘綾ト書レり歌ハ
ゆり糸ハ舊事云々歌ハ大中臣能宣朝臣の長歌ハ那須の湯ハ云々
温泉ハ那須嶽の麓ト其所ハ温泉神社あり是ハ延喜式の神名帳ハ載
レハ舊事ハ事云々歌ハ大中臣能宣朝臣の長歌ハ那須の湯ハ云々
ゆり糸ハ舊事云々歌ハ大中臣能宣朝臣の長歌ハ那須の湯ハ云々
あむと云々人ト云々信濃ハ須羽の湯ナリ國造本紀ハ那須國造ト
須羽國造ト誤レ記レ本ハ彼レ誤レ知レ
那須野の狩の事ハ東鑑ハ建久四年四月二日右大將頼朝卿宇都宮朝綱ハ
山朝政那須光資等ト仰テ狩ヲセ給フ云々

夫木抄 信實朝臣

道也ハ那須の法持の矢と云ハ一の事ハ麻の糸云々

全 權僧正

物人ハ云々事云々云々

金槐集

鎌倉右大臣殿の第一の秀逸ありと賀茂真淵稱羨セリ

ハの事ハ矢云々事云々

歌枕名寄 三宮

中務卿親王 此二首ハ名寄ハ良玉集トあれハ良玉ト云集云々

新和歌集 藤原親朝 那須野ハ狩ト云々道ト云々

世の中ハ事ハ云々事ハ云々

蒲生氏郷紀行

為景卿紀行

下野國誌二

晩花集物名雉子の雄鳥

下野のやむらひのふたばの志のきこりてまをのこひをさるる

漫吟集 名所今歌集に信濃と一々の例の誤なり

いつか今も後のあはれにむらひの出湯の中は絶つて

うたふる花

雪の深き那はらに紫糸志のいつかたよそを無きや

下野歌枕 藤原益男

出湯あはれにむらひの心志をたむれに里あはれに立燈りのれ

全 丹治信義

さうたふるるもの志の傳もその志のを齋に藤原

全 藤原一静

人よねねの志の那ふ後やうと雲のまゝ志をあきよる神

全 一とら

吹ぬらむにむらひの志の雲のまゝ志をあきよる神

全 おね

那須那路の志の那ふ後やうと雲のまゝ志をあきよる神

全 倭文刀自

あきよるに絶つてむらひの志の雲のまゝ志をあきよる神

朽木柳

チチキキヤキ

那須郡葦野驛の町より、西北の方百歩許あり、遊行柳と云れり、

猿樂の遊行柳と云謡曲ハ、則此柳を作りありと云のり、

田國雜記ニ宇都宮を立て行道ハ、塩屋といふ所侍り、云、中略朽木柳といふ

所より、古の柳ハ朽々々、其跡ハ植継いさす、苔ハ埋れて朽々バ

とちのハ此朽木の柳系とこそ、昔の歌ハ、とやわをそら

是より、稻澤の里より川よき川を、うち過て白河二所の關ハ云とあり、

稻澤村ハ、葦野驛と黒羽驛との間あり、黒川ハ、葦野の南の方あり、よき川

ハ、よき川より少南の方あり、

田國雜記標注ハ、関野洲良撰述あり朽木柳下野國那須郡にあり、陸奥界に近ハ

下野國誌二

下野の葦野驛より陸奥の白川より街道の西二町許あり朽木柳
又道のへれ柳と遊行柳と云道乃清水も同所あり此柳のあゝ邊を
古道筋ありと云

新古今三題考
道のよは清水なる柳は志げとてまゝなりけり

黒川春村、
遊行柳考、
此の西行上
人此所より
一なりと考
く考證し
たれども長
きに於ては
載り

西行法師此歌をまゝなり所なりとてり考るに安齋隨筆七に此歌の繪を
清水流る所の柳陰に西行の立よりる驛を繪くハ誤りあり此歌は大治
二年の頃鳥羽殿へ御幸を給ひて御所の御障子の繪の面白きを
御覽じて其時の歌を召して召して時則清を召して
よせしむる十首を一日よみするも其十首の中に清水流るる
柳の陰に水ひもど女房をかかへてをまゝなり西行記の巻物に
ありしが西行をまゝなり誤りなり此歌より頃ハいづれ出家せば其上
をばより立よりハ女房の繪あり云々西行物語上巻に清水流る柳加
げに旅人の休む所とてをまゝなり所とてなり詞あり考るにハ此地の歌
よあはれむ遊行柳といふハ謡曲にありハ人より考るることなかり初代の
遊行上人ハいづれ藤澤山清浄光寺の傳へ十四代目の大空上人此地を

通りし時彼柳の精女化して出て上人の濟度を願ひしなり此西行日中
の勤行をせしれをまゝ得脱しきなり謝して失ぬ是より例とあり代
乃上人巡國の時ハ必この柳の下に至り回向せし事今不替らばなり云
書あり

藤澤智察覺書ハ人皇百四代後土御門院の御宇文明三辛卯年遊行十九
世尊皓上人葦野修行あり枯木の柳乃性老翁と化し上人の前より
来り札を受十念を授り草木國土悉皆成佛の文を演説し給彼老翁の
歌

さよ木に浅む法法のをりまけハ朽木をなほし後りものも
上人より
おもひまや家法ののまよるハ柳の姿はあはれはれあやハ

と吟畢て柳の陰よりれぬをかん云々柳化度の考よりを殘されて建立あり
一所あり其木を遊行柳と名つる寺を揚柳寺とすなり云々
下野風土記作者不知
元禄元年近代の遊行上人の歌
手を経てまゝなり道のよは朽木の柳なりとて

竹葉集の二月廿六日葦野と云山陰の名木の柳あり是は遊行十九世の上人陸奥巡行し給ひたるに非常の姿翁と現して渴仰の氣色顯せし事世に云継つ隠しあるに尋寄てん昔の柳は朽果て葉かを垣結廻しとて夫と云る誠は草木國土悉皆成佛の奇瑞眼のありしを云りしに憑く覺ぐれば

ひまもちの柳とてけし法もあはれありまきくあも
今も吹つ了ふ法の花柳は枝よえをくうし
片葉の葦とて名あるはたつての心はあれはなかりえさげやそふ里
よ止宿も云く奥書は享保四年六月五日連阿とあり
遊行紀行より下野國葦野の里遊行柳の舊跡より
ふ柳とてわろこし法はのまに歌はてあり
くちあはれ葦野の柳あはれ世に法はのまにあり

蒲生氏郷紀行より白川の關を過行はふ下野よりわねや清く流る川
のよ柳ありしをいふ尋侍は是を遊行上人より道志とせし
柳のよとてきりけりや新古今より道のよ清水流る柳は侍りしを
あはれいぞ

下野歌枕 權大僧都賢順

流るる水はあはれ柳はけりまはるは道志とせし

全 紀幹有

あはれ柳のよとてきりけりや新古今より道のよ清水流る柳は侍りしを

全 紀俊豊

あはれ柳のよとてきりけりや新古今より道のよ清水流る柳は侍りしを

全 源顯雄

あはれ柳のよとてきりけりや新古今より道のよ清水流る柳は侍りしを

小大石より高さ五六丈もあざり、其形彼二玉の如し、是天工にして
絶妙あり、登るに一町餘りありて、臺石と呼ぶものあり、廣さ五坪許あり、
自然にして砥の如し、起て四方を眺む、此山中の風景坐あらしめて盡くあり、
是より下ること二間餘り、其甚しき險阻ありて、鬼の鬚籠と呼ぶ所あり、
下ること二町餘りありて、自然の石橋あり、其長さ二間餘り、廣さ凡五六尺許あり、
此橋より少し登りて、自然の石門あり、是を一の門と云ふあり、東向して其大石
廿間餘りあり、中函二間許、左右の小竇各々九尺許、門の形ハ琴柱に似り、是
より二町餘り行て、左の幽谷より、數十丈峙する大石あり、塔の如くありて、
櫓に似たり、叢樹頂に生ひ茂り、是より奇あり、下ること二町餘りあり、
裏見の瀧あり、水流の幅五六尺もあざりて、高きことハ計難し、とて日光山の裏見
瀧に似て、其奇ハ彼所より勝り、是より五町餘り登りて、右の方より白き巖五ツッて
り、文字石と名づく、其高きことハ計難し、此石ハ庚申の文字ありと云傳へ、
慥多岐より登り下り一町餘りありて、石門あり、是を二の門と云ふ、大石二間許
あり、中央の通り九尺許あり、此岩窟を凡一町餘りより行て、燈籠の形あり、
石あり、凡高き四五丈許あり、覺ゆ、登ること數百歩ありて、鐘に似る石を
かき見ゆ、凡高き二三丈あり、羅生鬼縁生ひて、真ハ庚鐘の如くあり、下る

こと數百歩ありて、石橋あり、其長さ九十二三間許あり、丘より峯に跨りて、
其下を見ゆれば、谷深きこと雲を生じ、幾千仞も計り難く、
恰も虹に似て、雲の榜とも思ふ、
鶴亀或ハ釜或ハ屏風あり、其形の似るに依りて、名づく、
數所ありて、上世穴居の址とも思ふ、
中ハ三窟ありて、屹として高きこと二三丈、
如く口おのくハ九尺許であり、其前ハ棟の形に似る、
下ること八町許ありて、
人衆を避ること遠く、
年中よりや登山も、
容易に及ぶ、

